

二〇二六年度 一般入学試験問題 国語

始まりのブザーが鳴るまで問題冊子、解答用紙に手を触れずに、
左記の注意事項に目を通しておくこと。

- ◎ 問題用紙は1ページから19ページまでであるので、始まりのブザーが鳴ったらすぐに確認すること。
- ◎ 最初に別紙の解答用紙に受験番号と氏名を記入してから問題を解くこと。
- ◎ 受験番号は所定の欄に記入後、それに該当するマーク欄にしっかり濃くマークすること。
- ◎ 問題は、記述問題とマーク問題の二種類がある。それぞれ所定欄に記入すること。
- ◎ とじてある問題用紙をばらばらにしたり、一部を切り取ったりしないこと。
- ◎ 終了のブザーが鳴ったら筆記用具を置くこと。
- ◎ 問題冊子は持ち帰ってもかまわない。

受験番号マーク例

良い例	●	悪い例	✓ ○ ●
-----	---	-----	-------

◎ 選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号・記号を記すこと。

◎ 字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】 次の文章を読み、後の問に答えよ。

言葉や物や観念のネットワークの中に、そうしたネットワークを作り出す存在としての人間がいる。とすると、そうしたネットワークを作り、機能させる「主体性」をもった存在、つまり「主体」として人間は存在しているのだろうか？ ここで「主体性」とは、自らの意思や判断で、自身の外側にある言葉や物や他の人間などの客体に能動的に働きかける能力のことを、そして「主体」とはそうした能力をもつ存在のことを、それぞれ意味している。

私たちの社会では、人間は主体的でありうるし、主体的であるべきだと考えられている。小学生のころから私たちは、自分から進んで、自分の考えで行動するように、つまり「主体的に行動するように」と言われてきた。民主主義では、有権者が主体的に候補者や政党を選択すべきだとされる。国民主権とは、国民が投票における意思決定の主体であるということでもある。物を買うときには、消費者は自らの需要や欲求と懷具合を勘案して、主体的に商品を購入する。キャッチセールスや催眠商法が違法であるのは、それらが買い手の主体性をそこなうからだ。刑事裁判では、被告がなぜ犯罪行為を行なったのが、その動機に即して解明されることが期待される。犯人が自ら犯罪を行なう主体であるとされているからだ。主体的でない犯罪者は、「心神喪失」であったことよって罪を免れることがある。罪を犯し、それを償うためには、人は罪の主体、償いの主体でなくてはならない。主体であること、主体的であることは、現代社会の前提であり、基本的なルールであり、道徳的かつ実践的な要請でもある。

けれどもまた、現代の哲学や社会学にそれなりに関心をもっている読者の中には、「そんな風に人間を主体であるかのように語ってしまっているの？」と感じている人もいるだろう。個々の人間に先立って社会的なものがあり、個々の人間はいつも後からその社会に参入する。私たちが語り、うたい、考える言葉はいつでもどこかで他者の言葉である。私たちが使用する道具の多くも他者の手になるもので、

それらを使いこなすには私たちの側がそれらになじみ、自らを合わせる必要がある。そうだとすれば、私たちは主体であるというよりも、言葉や物や観念がそれを通じて作動する媒体というほうが正確なのではないだろうか（だが、この場合、道具を最初に考案したり、それらを製作したりした人は「主体」であるということになるのだろうか？）。

もっと具体的な場面で、主体的であろうとしても十分にそうでありえない場合もある。選挙にしても買物にしても、自分の考えや嗜好に合わない候補者や商品しか選択肢になかったとしたら、それらの中から主体的に選択しろと言われても主体性の発揮のしようがないだろう。ア、十分にたくさん選択肢が与えられている場合でも、選ぶ側にそれらの選択肢の間の差異を正しく認識し、判断するだけの能力がなく、そのときの気分や感覚で選ぶしかなかったとしたら、それもまた「主体」や「主体的」という言葉に文字通りふさわしいとは言えない。先に例にあげたキャッチセールスや心神喪失の場合、現実には十分に主体的ではなかったと見なされる。日々の暮らしの中の雑事の数々も、私たちは習慣的に、しばしば取り立てて選択的な意思を働かすことなく行なっている。うっかりして何かを忘れてたり、ぼんやりしたままいつも通るのと同じ道を歩いたりというとき、私たちは何かを意識的に選択しているわけではない。こうした場合も私たちは、十分に主体的であると言うことはできない。

イ 私たちは、「主体」や「主体的」という言葉が想定しているような主体性を、いつももっているわけではない。私たちの社会が「人間が主体であること」をさまざまな場面で前提としているにもかかわらず、私たちは不十分に（あるいは限定的な意味で）主体的なのであり、またときどき主体的であるにすぎない。言ってみれば私たちは、^② 主体的なものである。

「主体」という言葉を右のような意味で使うとすると、私たちは呼吸や消化活動や感覚・知覚の主体であるとはもちろん言えない。息を止めることや、腹式呼吸をしたりして息を整えることはできるけれど、呼吸は生命体としての身体が不随意に行なうもので、個人が主体的に呼吸しているわけではない。消化に悪いものを食べて消化活動を阻害したり、胃薬を飲んでそれを整えたりできるとしても、主体的に消化することもない。物を見たり、匂いを嗅いだり、音を聞いたりすることは、視線の向け方や注意の仕方かなりの選択性をもつ。ウ、それ以前に物は見えてしまい、匂いは嗅いでしまい、音は聞こえてしまう。このように非主体的で無意識のうちになされる活動や感覚など、他の動物や植物とも共通する生命過程が、私たちが生き、経験することの「存在の地」や「基層」とでも呼ぶべき部分を占めている。

エ、こうした生命過程のことを、私たちは普通「人生」とは呼ばない。普通言うところの人生とは、存在の地をなすこうした生命過程の上に乗って、ある人が何かを意思したり、選択したりする営みとその結果のことだ。日々の暮らしの中で主体的たりえないことがいろいろあるとしても、人はそうした社会的制約の中で、なにがしかの選択や決定をして生きている。

〈中略〉

私たちは人と言葉を交わすとき、相手の体と自分の体の間の距離を、相手との社会的な位置関係や、そのときどきのコミュニケーションを意味づける指標としている。恋人や幼い自分の子どもと親密な話をするときには、文字どおり頬を寄せて言葉を交わすことがあるが、普通の友人関係や仕事上の関係、他人の子どもとの間などでは、そうした距離をとることはない。また、いくら親密な間柄でも、議論を交わすときや子どもを叱るときには、もつと離れた距離をとるだろう。個人的なおしゃべりからあらたまった会議、不特定多数の人に話しかける演説と、相手との関係や話題が個人的で親密なものから非個人的で公的なものになるにつれ、身体間の距離は次第に大きく、遠くなってゆく。通常意識していないにもかかわらず、無意識のうちにそうした距離をとることで、私たちは社会的な関係の親密さをそのつど測り、調整しながら社会生活を送っている。もしこれを意識的に行なおうとしたら、呼吸やまばたきをずっと意識し続けようとしたときに感じるように、精神的にも肉体的にもかなりのストレスになることだろう。

③ 重要なことは、こうした距離帯が無意識的であるにもかかわらず、文化的、社会的なものであるということだ。どれくらいの距離をとるとき、きわめて親密な距離から一般的な友人関係に移行し、さらにどれくらい離れたらフォーマルな会議等にふさわしい距離になるのかは、文化や社会によって異なっている。たとえば多くの日本人は相当に親しい関係にならない限り、人前で抱きあったり、キスしたりすることはないが、欧米では日本人が考えるほどには親しくない間柄での挨拶として、抱擁やキスという身体を密着させた距離をとることが許容されている。身体間のこの社会的、文化的な距離帯の存在は、私たちの社会生活が無意識的で身体的であると同時に社会的、文化的でもある層をもっていること、私たちの意識的で主体的な営みが、こうした無意識的で身体的な社会的、文化的層の上に成立していることを示している。言ってみればそれらは、「自然な身振り」として振る舞われる社会的、文化的な行動の形なのだ。

こうした社会的な距離帯は、一般に「非言語コミュニケーション」と呼ばれるものの一部である。ノンバーバル・コミュニケーションとは、姿勢、身振り、表情など、文脈の定義や意味の伝達にかかわる非言語的要素によるコミュニケーションのことだ。さらに、「周辺

言語」と呼ばれる口調、声色、声の大きさなどのコミュニケーションの要素もある。私たちは会話したり、何かを語ろうとしたりするとき、無意識のうちにこうしたコミュニケーションの諸要素を動員し、操作している。また、何も口に出していないときでも、ある人の姿勢や表情、たたくまいが文字通り何かを「語る」ことがある。私たちはこうした要素からなるコミュニケーションの層を意識的に操作することもできるけれど、こうした要素の多くの部分は通常は意識されなのまま、身体化され、遂行されているのである。

無声映画を解説や字幕抜きである程度理解したり、言葉の通じない社会でも人びとの表情や声の調子をそれなりに読みとったりできるように、言葉によるコミュニケーションは身体によるコミュニケーションの上に「乗っている」。ここで「身体によるコミュニケーション」と言うのは、体を使って意思的、主体的に何かを伝えようとすることばかりでなく、無意識的な振る舞いや、必ずしも他者による読みとりを想定しない表情や姿勢、態度も含んでいる。身体をもつてある具体的な状況を生きていることそれ自体が、そこに立ち会う他の人びとに対して何かを示してしまうこと。言葉を交わす以前に、身体としてともにあることが開く関係の次元をここでは、言葉の最も広い意味での「コミュニケーション」と呼んでいるわけだ。それはつまり、具体的な身体をもつて、他者と社会的な状況を共有してともにあるということだ。たとえば言うのと、言葉のネットワークの下に、それが伝わってゆく道のようなものとして身体の共在（＝ともにあること）があるのだと言えるかもしれない。

（若林幹夫『社会学入門 一歩前』より）

問一 — ①のように考えるのはなぜか。二つ選べ。

- ア 人間は取り巻く環境に自らを順応させて生活しているから
- イ 人間は家族や友人といった他者を求める生き物だから
- ウ 人間の能動的な働きかけは社会を乱す原因になるから
- エ 人間の中には主体性を獲得する前の乳児も含まれるから
- オ 人間が万物の創造主であるという誤った考えを導くから
- カ 人間は常に意識的であり続けることはできないから

問二 — ②の に入るのはどれか。マーク 1

- 1 おしなべて
- 2 まだらに
- 3 すこぶる
- 4 つぶさに

問三 — ③とはどういうことか。マーク 2

- 1 コミュニケーションを図る際の身体的な距離は、文化や社会によって生み出されるということ。
- 2 身体的なコミュニケーションは近代社会を形成する重要な要素のひとつとなっているということ。
- 3 文化や社会は意識的に形成されるものではなく、身体的なコミュニケーションによって成立するということ。
- 4 身体的なコミュニケーションの距離感によって、その文化や社会における人々の成熟度が測れるということ。

問四 ア エ に入る語の組み合わせはどれか。マーク 3

- 1 ア とはいえ イ だが ウ また エ このように
- 2 ア このように イ とはいえ ウ だが エ また
- 3 ア また イ このように ウ とはいえ エ だが
- 4 ア だが イ また ウ このように エ とはいえ

問五 本文の内容に合うのはどれか。二つ選べ。

- ア 身振りや表情の持つ意味が共通している共同体の言語同士を、「周辺言語」という。
- イ 非言語コミュニケーションよりも、発話による伝達の方を受け手は重視しがちである。
- ウ 刑事裁判における量刑は、犯人が意思決定の主体であるかどうかに関わらず科される。
- エ 私たちは消化や呼吸などの非主体的な活動を行なうことで、日常生活を営んでいる。
- オ 円滑な人間関係を築くためには、身体的振る舞いを常に意識することが必要である。
- カ 社会的な状況を共有できていないと、コミュニケーションに誤解が生じることがある。

【二】次の文章を読み、後の問に答えよ。

先日、「外国語教育と異文化理解」というテーマでのシンポジウムで、「目標文化」というあまりなじみのない言葉を聞いた。「目標文化」というのは、私たちがあある外国語を学ぶとき、その学習を通じてめざす文化のことである。フランス語を学ぶ場合、フランス語は「目標言語」、フランス文化は「目標文化」と呼ばれる。

① という説明を聞いたとき、何か強い違和感を覚えた。発表者は「目標文化に到達するためには、目標言語による教育が必須である」というネイティブの教師が強く主張する教育観を取り上げて、それに対する疑念を語っていた。

私もそれに頷いた。② 苦い経験があるからである。二十年ほど前、ある語学学校で、フランスのテレビの「お笑い番組」のビデオを見せられて、早口のギャグの聴き取りを命じられた。私はその課題を拒否して、「私はこのような聴き取り能力の習得には関心がない」と告げたところ、教師は激怒して、「市井のフランス人が現に話しているコロキアルな言葉が理解できない人間はフランス文化をついに理解できないであろう」と述べた。彼女の予言は正しかったことが後にわかるのだけれど、そのとき私がこのフランス人教師と意見が対立したのは、私と彼女が「フランス文化とはこういうものだ」と思い込んでいたのが同じではなかったからである。

私がフランス語の習得を志したのは、六〇年代の知的なイノベーションの過半がフランス語話者によってなされているように見えたからである。サルトル、カミュ、レヴィ・ストロース、フーコー、ラカン、バルト、デリダ、レヴィナスたちの仕事はこの時期に集中しており、彼らの最新の知見にアクセスするためにフランス語運用能力は必須と思われた。私はこの「知的饗宴」を欲望してフランス語を学び始めたのであって、③ に特段の興味があつたわけではない（今もない）。

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑

ル」というふうに定義されるのだろうか、英語はそうではない。英語話者たちもまたある「種族の文化」をめざしてはいるのである。ただ、その「種族」は近代国家論的な枠組みでの国民国家ではないということである。

「英語ができる人」がアメリカ文化やイギリス文化やカナダ文化やニュージーランド文化について造詣が深いということはない。大学の英文学科に進学する高校生たちが書く志望理由のほとんどは「英語を生かした職業に就きたい」というものである。彼らは卒業後に例えば香港の航空会社やドバイのホテルに就職する。中国文化やアラビア半島の文化に興味があつてそうしたと思う人はいないだろう。

少し似た状況が六〇―七〇年代にもあつた。この時期、理系で履修者が一番多かった第二外国語は意外なことにロシア語である。それは一九五〇―六〇年代にソ連が宇宙開発や原子力工学でアメリカをしばしば凌駕していったという科学史的事実を映し出している。そののち、ご案内の通り、ソ連崩壊とともに、ロシア語を学ぶ学生は^⑤ が引くようになつた。理系の学生をロシア語に惹きつけたのは、ロシア語運用能力が彼らにもたらずであるう學術上の、あるいは生活上の「利便性」、^⑥ にべもない言い方をすれば「利益」であつたから、その保証がなくなれば、ロシア語を習得する動機は消失する。一方、チェーホフやドストエフスキーを読むために露文に進む学生たちのロシア語学習動機は、東西冷戦構造や宇宙開発競争とはかわりがない。

私たちに言えるのは、どの外国語を学習するかということ、学習者がどのような目標文化を標的にしているかということの間には^⑦ ということである。

私自身はまず英語と漢文を学び、それからフランス語を学び、^⑧ 少しだけヘブライ語を嚙つた。どれも中途半端に終わったが、それらの外国語を習得しようと決意して辞書や教則本を買い込んだときの浮き立つような気分は今でも忘れない。私の場合、それはいつも同じ気分だつた。「今の自分が使っている言葉でしか思考できない、表現できない、対話できない」という息苦しさから離脱することを期待したのである。私はどこか他の種族の文化を血肉化したかたではない。種族の文化そのものから離脱したかたなのである。「こことは違う場所、今とは違う時間、私とは別の人」に出会うことを切望していたのである。フランスの知識人たちの「知的饗宴」を欲望したのは、それが母語的現実から隔たること最も遠いものと思えたからである。

その後、私が母語的現実から少しでも身を引き剥がすことができたのかどうか、わからない。わかるのは、私が母語を含めてあらゆる言語の「不器用な遣い手」になつてしまつたということだけである。

(内田樹「目標文化をもたない言語」『ベスト・エッセイ2012』より)

問一 — ①はなぜか。マーク 4

- 1 ある言語の母語話者と同程度に話せるようになれば、その文化に到達できるというものではないから。
- 2 ある文化の理解にはその文化圏の使用言語の習得が必須であることは、言うまでもないことだから。
- 3 ある言語の習得は、その言語を用いる文化を理解することを目的とするとは限らないから。
- 4 ある一つの文化を深く理解することよりも、もっと実用性の高い言語を学んだ方が有益だから。

問二 — ② に入ることはを本文中から八字で抜き出せ。

問三 — ③とはどのようなものか。マーク 5

- 1 国民がよりよい国を目指して更新し続ける文化
- 2 長い歴史のなかで失われてしまった伝統的な文化
- 3 最新の知見を持つ人々に共有されている高尚な文化
- 4 国民の多くが日常生活の中で共有している文化

問四 — ④とはどういうことか。マーク 6

- 1 英語は、それを通じてある特定の目標文化に到達するためのツールではないということ。
- 2 英語は、それさえ習得すれば世界中どこへ行っても有効なツールであるということ。
- 3 英語は「種族の文化」を持たないので、どの言語よりも汎用性が高いということ。
- 4 英語は歴史の深い言語ではないため、無限の可能性を秘めているということ。

問五 — ⑤の に漢字一字を入れ、慣用句を完成させよ。

問六 — ⑥の意味はどれか。マーク 7

- 1 えげつない
- 2 そっけない
- 3 つたない
- 4 はしたない

問七

⑦

に入るのはどれか。

8

- 1 絶対的な理由がある
- 2 一意的な相関はない
- 3 決定的な懸隔がある
- 4 打算的な意図はない

問八

⑧とはどのようなものか。

マーク

9

- 1 言語習得の過程で多様な視点を知り、優れた文化を獲得できるのではないかと期待。
- 2 別の言語を習得しても今まで通りの自分でいられるのではないかと期待。
- 3 言語によって限定された今の生き方から解放されるのではないかと期待。
- 4 新たに得た価値観で、因習に縛られた社会をも変えられるのではないかと期待。

【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

朝ごはんにはミルクが似合う。牛乳の白さが、一日の始まりの気分と合うのだろうか。オレンジジュースでもよさそうなものだけ、朝のイメージにはミルクの方がぴったりする。

① あたためしミルクがあましいづくにか最後の朝餉あさげ食む人もゐむ

大西 民子

あたたかいミルクを飲んでみると、子ども時代に戻ったような気分になる。砂糖を入れなくても、温めたミルクはほの甘い。満たされた気持ちでこくこくと飲んでいる作者は、ふと「この瞬間、私と同じように朝ごはんを食べている人がどれほどいるのだろうか」と思う。そして、「その中には、最後の朝ごはんを食べている人もどこかにいるのだろうか……」と考えを巡らす。

満員電車に揺られつつ、「いま事故に遭ったら、この人たちと一緒に死ぬのだな」と考えることは私にもあるが、朝食を食べながら、目の前にいない人のことを思う想像力には感服する。希望に満ちた朝を象徴するミルクと、見知らぬ人の死を組み合わせた感覚には、歌人の透徹したまなざしがある。

すれ違ふ誰ひとりとして今朝われがミルクこぼしたことなど知らぬ

香川 ヒサ

ミルクを注こぼごうとしてこぼした時に味わう、一種の呵責かしゃくというものがある。水や紅茶などとは異なる、何か実のある液体を不注意でこぼしてしまったことに対する後ろめたさ、とても言おうか。

外出すれば何人もの人とすれ違ふ。顔見知りもいれば、一回限りしか遭遇しない人もいる。その誰ひとりとして、作者がその朝ミルクをこぼしてしまったことを知らないというのが歌の内容だ。「そんなこと当たり前じゃないの」と思う人もいるだろう。だが、よく考えてみると深い。友人を裏切ろうと、妻子ある人を愛そうと、他人はそれを知らない。すべて自分の行いは、自分が一人で責任をとらねば

ならないのである。人は孤独であるということが、しんしんと伝わってくる歌といえよう。さらに読み込めば、すれ違う人は誰も知らないかもしれないが、「ミルクこぼしたこと」さえ知る存在がどこかに在るのではないか、在ってほしい、という敬虔けいけんな思いもあるように思う。

この作者は、ありとあらゆる「当たり前」の事柄を、角度を変えて詠い続けている人である。「角砂糖ガラスの壘びんに詰めゆくにいかに詰めても隙間が残る」というような、不思議な魅力に満ちた歌は、まるで箴言しんげんのようだ。人それぞれの「ミルクこぼしたこと」を思う。

⑤ 牛乳をこぼせし痕あとのひかりつつ天の銀河へ還りゆくなり

喜多 弘樹

牛乳をこぼしてしまうと、人は悲しくなる。「こぼれたミルク＝spilt milk」を嘆いても仕方ない、という英語のことわざは「 ⑥ 盆に返らず」と同義だが、水よりも悲しみは深いように思う。この作者も、こぼした瞬間「あああ……」と思ったのだろうが、ミルクのこぼれた筋を眺めているうちに「Milky Way (天の川、銀河)」という言葉など連想したのかもしれない。

自分のこぼしたミルクは、ここ(卓上? 床?)で途切れてしまうのではない。空の上の銀河につながってゆくのだ。きつとそうに違いない——。そう思わねばいられないような気持ちにさせられるのが、ミルクの不思議なところである。こぼしてしまったミルクの筋が光り、銀河へ還ってゆくというイメージは、遥はるかけて繊細な魅力に富む。

(松村由利子『語りだすオブジェ』より)

問一 — ①は何句切れか。マーク

10

- 1 初句切れ 2 二句切れ 3 三句切れ 4 四句切れ 5 句切れなし

問二 — ②とはどのようなものか。マーク 11

1 希少で高価なもの

2 純白で清らかなもの

3 生命を直接的に感じるもの

4 爽やかな朝を象徴するもの

問三 — ③と同じ表現技法が使われているのはどれか。マーク 12

1 ひうひうと風は空ゆく冬ぼたん

2 ぼきぼきとふたもと手折る黄ぎく哉かな

3 びいと啼なく尻声悲し夜の鹿

4 むくと起きて雉追ふ犬や宝でら

問四 — ④とはどういうことか。マーク 13

1 真理に気付かせる言葉だということ

2 焦燥感をかきたてる言葉だということ

3 日常に彩りを添える言葉だということ

4 理想的な生き方を示す言葉だということ

問五 — ⑤と同じ表現技法が使われているのはどれか。マーク 14

1 かへりみちひとりラーメン食ふことをたのしみとして君とわかれき

2 体温計くわえて窓に額つけ「ゆひら」とさわぐ雪のことかよ

3 ハムレタスサンドは床に落ちパンとレタスとハムとパンに分かれた

4 自転車のヘッドライトの光線は闇から闇へ渡す架け橋

問六 — ⑥の に入る語を漢字二字で記せ。

【四】以下の問いに答えよ。

問一 次の傍線部の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直せ。

- ① 法律を遵守する
- ② グラフの凡例を参照する
- ③ フキユウの名作に感動する
- ④ 龍はカクウの生き物だ

問二 次の傍線部のカタカナと同じ漢字はどれか。

- ① その行為は法律にテイシヨクする可能性がある **マーク** 15
 - 1 システムをテイシする
 - 2 タイテイの物事はうまくいく
 - 3 冬休みの宿題をテイシユツする
 - 4 最寄り駅までのテイキ券を購入する
 - 5 三角形のテイヘンから面積を求める
- ② 人生を変えるケイキとなった出会い **マーク** 16
 - 1 試合終了間際にケイセイが逆転する
 - 2 古いケイジ物をはがす
 - 3 落とし物をケイサツに届ける
 - 4 協力して負担をケイゲンする
 - 5 新しい家のケイヤクをする

③ コウイン矢のごとし マーク 17

1 最近発売されたインリヨウ水

2 論文をインヨウしてレポートを書く

3 父の代からのインネンが深い土地

4 退職後は田舎にインキョしたい

5 インケンなやり口は好まない

問三 次の空欄に入る漢字一字をそれぞれ記せ。

● 先生が忙しそうにしているので取り付く ① もない

● 彼の失敗を他山の ② として私も気を付けよう

● 生徒会長の座を虎 ③ 眈々と狙っている

【五】次の文章を読み、後の問に答えよ。

今は昔、天竺^①に兔・狐・猿、三つの獣有りて、共に誠の心を起こして菩薩の道を行ひけり。おのおの思はく、「我ら前世に罪障深重にしていやしき獣と生まれたり。これ前世に生有る者をあはれまず、財物を惜しみて人に与へず。かくのごとくの罪深くして地獄におちて、苦を久しく受けて残りの報にかく生まれたるなり。」^②さればこの度、この身を捨てむ」。年我より老いたるをば親のごとくに敬ひ、年我より少し進みたるをば兄のごとくにし、年我より少し劣りたるをば弟のごとくあはれみ、自らの事をば捨てて他の事を先とす。

天帝釈これを見たまひて、「これら獣の身なりといへども、有難き心なり。人の身を受けたりといへども、あるいは生きたる者を殺し、あるいは人の財を奪ひ、あるいは父母を殺し、あるいは兄弟を仇敵^{あだがたき}のごとく思ひ、あるいは笑みの内にも悪しき思ひあり、あるいは恋ひたる形にも怒れる心深し。^③いかにいはむや、かくのごときの獣は誠の心深く思ひ難し。されば試みむ」と思して、たちまちに老いたる翁^{おきな}の無力にして疲れ術なげなる形に変じて、この三つの獣の有る所に至りたまひてのたまはく、「我年老ひ疲れてせむ方無し。汝ら三の獣、我を養ひたまへ。我子無く家貧しくして食物無し。聞けば、汝ら三の獣、あはれみの心深く有り」と。三の獣この事を聞きて言はく、「これ、^④我等が本の心なり。速やかに養ふべし」と言ひて、猿は木に登りて栗・柿・梨・なつめ・あけび等を取りて持て来たり、里に出ては瓜・茄子・大豆・小豆・粟等を取りて持て来たりて、好みにしたがひて食せしむ。狐は墓の辺に行きて人の祭り置きたる餅・鮑^{あはび}・鰹、種々の魚類等の取りて持て来たりて、思ひにしたがひて食せしむるに、翁既に飽満しぬ。

かくのごとくして日頃を経るに、翁の言はく、「この二つの獣はまことに深き心有りけり。^⑤これ既に なりけり」と言ふに、兔は励みの心を起こして灯を取り、香を取りて、耳は高くくぐせにして、目は大きに、前の足短く、尻の穴は大きに開きて、東西南北求め歩けども、さらに求め得たる物無し。されば猿・狐と翁と、且つははづかしめ、且つは侮り笑ひて励ませども、力及ばずして、兔の思はく、「我翁を養はむが為に野山に行くといへども、野山怖ろしくわりなし。人に殺され、獣に食らはるべし。」^⑦いたづらに、心に非ず身を失ふ事はかり無し。ただしかじ、我今この身を捨てて、この翁に食らはれて永くこの生を離れむ」と思ひて、翁のもとに行きて言はく、「今我出でて、^⑧甘美の物を求めて来たらむとす。木を拾ひて火をたきて待ちたまへ」と。しからば猿は木を拾ひて来たりぬ。狐は火を取りて来たりてたきつけて、「もしや」と待つほどに、兔持つ物無くして来たり。その時に猿・狐、これを見て言はく、「汝何物をか持て

来たるらむ。これ思ひつる事なり。虚言を以て人を謀りて、木を拾はせ火をたかせて、汝火を温まむとて、あなにく」と言へば、兎、「我食物を求めて持て来たるに力無し。さればただ我が身を焼きて食らひたまふべし」と言ひて、火の中に踊り入りて焼け死にぬ。

その時に天帝釈、本の形に復して、この兎の火に入りたる形を [9] の中に移して、あまねく一切の衆生に見しめむがために、 [9] の中に籠めたまひつ。されば、 [9] の面に雲のやうなる物の有るは、この兎の火に焼けたる煙なり。また、 [9] の中に兎の有ると言ふは、この兎の形なり。万の人、 [9] を見むことにこの兎の事思ひ出づべし。

(『今昔物語集』より)

問一 — ①は現在のどの国を指すか。マーク [18]

- 1 中国
- 2 インド
- 3 日本
- 4 モンゴル
- 5 韓国

問二 — ②とはどういうことか。マーク [19]

- 1 地獄で苦しみを受けても罪を消しきれず畜生として生まれたのだから、今度は獣身する生き方をしようということ。
- 2 悪行のゆえに十分苦しんだのに今世でも獣に生まれてしまうなんて、もう生きる希望を持つことができないということ。
- 3 残酷な過去を清算するために身を粉にして働いたように、生まれ変わった後も労苦をいとわず勤勉に努めようということ。
- 4 仏道修行をしても罪深い畜生の身では地獄におちて苦しむことになるので、いつそ帰依するのをやめようかということ。

問三 — ③の意味はどれか。マーク [20]

- 1 たとえ
- 2 まるで
- 3 あえて
- 4 まして

問四

④とはどういうことか。マーク 21

- 1 年老いた翁は、私たちが手本とすべき精神を持っているということ。
- 2 いやしい翁の姿は、私たちの転生前の姿を思い出させるということ。
- 3 哀れみ深いという評判は、私たちにとって喜ばしいことだということ。
- 4 翁の申し出は、私たちがずっと願っていたことであるということ。

問五

⑤の に入る語を、傍線部より前の本文中から漢字二字で抜き出せ。

問六

⑥はどのような様子か。マーク 22

- 1 憤っている様子
- 2 警戒している様子
- 3 必死になっている様子
- 4 調子に乗っている様子

問七

⑦とはどういうことか。マーク 23

- 1 馬鹿にされて面目をつぶされても仕方のないことであるということ
- 2 不本意ながらむだ死にしまう可能性が高いだろうということ
- 3 むやみに続けても正気を失ってしまう危険性があるということ
- 4 役に立たない行動ばかりでは目的を忘れてしまいそうだということ

問八

⑧になったのは何か。本文中から抜き出せ。

問九

⑨に入る語を漢字一字で記せ。

問十

本文の内容に合うのはどれか。マーク

24

- 1 天帝釈は獣たちの心を試したが、獣たちの行動は彼を納得させるものだった。
- 2 人間は表に現れる感情と心の内が一致しないので、獣より罪深い生き物である。
- 3 天帝釈は貧しい翁をかわいそうに思い、猿・狐・兎に彼の世話をさせた。
- 4 猿と狐は兎に厳しく接することもあったが、翁だけはいつも優しくかった。